

外部有識者との対談を通した広報戦略 「国立大学に期待すること」

2015年8月、本学は株式会社南日本放送と連携協定を締結した。この協定は、「ふるさとたっぷり」を社是とし地域振興に力を注ぐ南日本放送と、スポーツ・健康科学分野の教育研究に幅広く携わる本学が連携・協力し、スポーツ及び健康増進に関する番組の製作等による地域貢献事業を推進することを目的としている。

このたび、南日本放送の中村耕治代表取締役社長をお迎えし、今年8月に就任した松下雅雄学長との対談を実施。新学長の大学運営方針や、鹿屋体育大学に期待する役割・可能性などについて様々な意見が交わされた。



「しっかりと教育をしなければ大学はその役割を果たしたことはない。」

松下：本日は外部有識者との対談を通した広報戦略ということで、「国立大学に期待すること」というテーマでお話を伺えればと思います。

その前にまず、私が学長に立候補したときに示した「鹿屋体育大学アクションプラン」についてお話をさせていただければと思います。これは、大学の中期目標にもとづいて大学として中期期間にやっていきたいということをもとめたものです。

中村：これを見ると、大学には一般的に教育・研究という2本の柱がある中で、学長は特に教育に力を入れていきたいということですが、それはなぜでしょうか。

松下：大学は高等教育機関ですから、研究もちろん大切ですが、やはりしっかりと教育をしなければその役割を果たしたということにはならないだろうと考えています。うちに来てくれた学生が、「この鹿屋に来て体育をしっかりと勉強できた」「ここに来て良かった」と思えるように、そして卒業して「鹿屋体育大学は私の母校です」と胸を張って、自信を持って言えるような大学にしていきたいと思っています。大学時代という大事な時期を誇れるか誇れないか、人前で堂々と言えるのかどうかということは、これからの人生で大き

なキーポイントであろうと思っています。そういった意味で、しっかりとした教育をしていきたいと思っています。特に、本学は部活動で活躍する学生が多い。全国大会へ出場する学生も多いですし、世界の舞台で活躍している学生もいます。それはとても嬉しいことですが、反面、大会出場中は授業を受けることができないということになります。そういった学生達に教育環境をちゃんと与えてやらないといけない。せっかく大学に来ているのだから、競技だけではなくしっかりと学んで知識を深めてほしい。だからやはり教育というものを重視してしっかりと取り組んでいきたいと考えています。

中村：世間的には、体育大学というとトップアスリートを生み出す大学という風にイメージしがちなのですが、今おっしゃる教育というのはもっと裾野が広いイメージですね。

松下：私は、「トップアスリートの輩出」というのはあくまでも「うちの教育でしっかりとトレーニングすればトップアスリートを生み出すことができる」という「結果・エビデンス」であって、本学の役目はスポーツ関係のリーダーを育成することだと思っています。

中村：なるほど。では、教育の中身についてですが、私は大学ではリベラルアーツとか一般的・基本的教養を身に付けることも大切だと思っています。しかし最近では、だんだんそれが合理的に削がれていって、すぐに役に立つ、必要性の高い物だけが選ばれるようになっていくように感じます。

松下：そうですね。私は大学でスポーツ関係のリーダーを育成したいと言いました。リーダーになっていくときに、やはり品格のある人間でないとリーダーとして受け入れてもらえないと思います。となると、専門の知識・技能を身に付けるだけではなくて、教養の部分もしっかり教育するというのを、真剣に考えていかなければならない。

中村：基礎的な能力をつけるという部分が削がれてきている時代だからこそ、そこは真剣に考えなくてはならないですね。ただ強い選手をつくるのだったら、専門学校や、塾みたいなものですから。それだけではない、教養を含めた教育というところに、大学の本質があると思います。



中村社長

松下：そこをしっかりと教育せずに「強ければいいだろう」ということになってしまうと、ドーピングや、体罰などの問題が付きまわってしまいます。人間の行為として正しいかどうかという議論になるときにはその人の持つ教養というのがクローズアップされる。だから本学では専門性だけでなく、しっかりとした教養も身につけさせたいと思っています。

中村：なるほど。それでは、2020年には東京オリンピックとかごしま国体へ向けてどのような教育をしていきたいというものはありますか。

松下：オリンピックや国体などのスポーツイベントにおいて、「する」「観る」「支える」の中で「する」部分、つまり選手がメダルを獲った獲らないということは非常にクローズアップされますが、一方で「観る」「支える」という部分はあまり注目されてきませんでした。しかし、「する、観る、支える」の三つが一体化してはじめてスポーツが世の中にしっかりと花開くと思います。ですから、大学としては「観る」「支える」という部分もしっかり教育していくべきだと思っています。「観る」ということに関しては、やはりスポーツの「見方」というのもあると思うんです。なじみのない競技でも、ルールを分かった上で見ると



松下学長

「この競技ってこんなにおもしろいんだ」となるわけです。ですから大学でそういった「見方」を教育して、学生が地域に出て行ってまたそれを伝えられるようにしていきたいと思っています。また、「支える」という部分ではボランティアなどの協力はもちろん、大学の設備を生かして合宿を受け入れたりということも、鹿屋市などの地方公共団体と連携しながら積極的にやっていきたいと思っています。

中村：オリンピックレガシーと言いますがけれども、ここは教育機関なので、箱以外のレガシーを創ることが一つの役割になるでしょうね。私は、オリンピックや国体をアスリートだけのものにしてはもったいないと思っています。そういった意味では今、先生がおっしゃられたように、全く初めて観るスポーツでもきちんとポイントを押さえて、「見方」を知って見ると面白かったりするわけですから、「観る」部分の教育は大切だと思います。そして我々メディアとしてもスポーツのおもしろさを伝えることができるよう取り組んでいくことが必要だと感じています。今回のリオデジャネイロオリンピックを観ていても、インターネット等で単に競技の様子を中継するのとテレビの中継とでは観る方の感じ方が違うなと思いました。テレビはアナウンスや解説によってスポーツのドラマをものすごく感じるわけです。ですから我々の役割というのはただ映像を流すだけではなく、視聴者のみなさんにドラマを伝え、スポーツの力というものを、知り、感じる機会を提供することだと思います。

「大学の名が知れることでいろいろな広がりが出てくる」

中村：先ほど、「トップアスリートの輩出」はあくまでも「結果・エビデンス」であって、そのこと自体が目標ではないとおっしゃいました。とはいえ、今年のリオデジャネイロオリンピックには鹿屋体育大学の関係者から3名のオリンピック選手がでました。そして過去には柴田亜衣さんが金メダルを取っています。やはりトップアスリートの輩出ということも鹿屋体育大学に期待されることの一つなのではないでしょうか。

松下：日本のトップレベル近くまではトレーニングをしっかりと積み重ねていけば到達するのですが、チャンピオンになるというのは素材とトレーニング方式が合わないといけません。実際、本学は創立から20年間はオリンピック選手を出せなかったわけですから。平成16年に、柴田さんが初めてオリンピックの代表に選ばれました。私は当時副学長だったのですが、その時の競技力向上担当の学長補佐が「オリンピック選手になるチャンスがあるのはこの子しかいない」と言ってきて、「チャンスがあるならば」ということで高地トレーニングへ行かせました。帰ってきた4月に全日本選手権で2位になりオリンピック出場権を獲得したのですが、彼女はオリンピックに行く前には日本ですら一度もチャンピオンになっていないんです。ところが、それからあれよあれよと記録が伸びて、オリンピックで金メダルを獲ったんです。

中村：あれで鹿屋体育大学の名が一気に知れ渡りましたよね。やはりトップアスリートの輩出というのは大学のプロモーションに大きく貢献すると思います。そうやって大学の名が世間に知れることでまたいろいろな広がりが出てきます。そして鹿屋体育大学が有名になることは、少なからず、鹿屋、鹿児島という地域の活性化にもつながると思います。だから、オリンピックを東京だけのものにしては、もったいないと思います。オリンピック



を、鹿屋体育大学の価値を日本中に発信するチャンスとして生かしていくべきだと。オリンピックの時には海外からもアスリートだけではなく様々な方がいらっしゃる。その時に、オリンピックの後に鹿児島にも来てもらえるような、そこまでの情報発信ができればよいと思います。だから、東京オリンピックの時は鹿屋の表記を「KANROYA」という横文字にしようというのが私の情報発信の案なんですけど（笑）。何か4年の間にそういう流れができないかなと思っているんです。

「教育研究を社会貢献に繋げていきたい」

中村：先ほども少し触れましたが、鹿屋体育大学の地域への影響力は大きいと思います。2020年、オリンピックの時にたまたま鹿児島で国体があるという巡り合わせの中で、鹿屋体育大学が注目されます。その中で、鹿屋体育大学で行っている貯筋運動をはじめとする地域の健康増進のための活動を通して、鹿児島県民の方々の健康の意識を高める機会にするということも鹿屋体育大学の役割の一つとして期待していますが、いかがでしょうか。

松下：貯筋運動については、早く社会貢献活動にしたいと思っています。今は研究活動のプロジェクトということでやっているんですが、そうではなく、例えば大学院生レベルでしっかりと指導者を育成して、その人を派遣するというシステムに変えて、地域の健康づくりに貢献するという仕組みにしたいのです。貯筋運動そのものの効果で貢献することはもちろん、学生が貯筋運動教室の指導者で来ると、中高年の方たちも「若さをもらえる」

と喜んでくださいます。

中村：そういえば、先日ご婦人のバレーボールの大会があったのですが、準備運動に鹿屋体育大学の大学院生が準備運動の指導に来てくれたんです。若いイケメンの学生が来て、指導もすごく上手で人気者になりました。ちょっとしたことですが、こういう形での社会貢献もあるなと感じました。

松下：そうですね。私はいくら全国唯一の国立の4年制体育大学といっても地域に根差してがんばれないと浮き草になると思っています。地域の方が新入生歓迎会を開いてくれたりとか色々な形で本学を応援してくださっています。一方で本学のほうから地域に向かってやっていることがあるのかと考えたときに公開講座ぐらいしかないという現状があります。地域に愛されて、信頼されてから初めて全国に打ち出していくというのが大事なことではないかと思っています。だから社会貢献についてはもっと積極的に取り組んでいきたい。大学の使命は教育研究だけれども、それを社会貢献に繋げていきたいと思っています。



中村：その時は、我々メディアをぜひ活用してください。我々も鹿屋体育大学が持っている価値をいろいろと引き出していきたいと思っています。社会貢献ということであると、先ほど先生が「この大学に行って良かったな」と言う学生を育てたいとおっしゃっていましたが、それは「鹿児島という地域に来てよかったな」ということを発信していくことにもなると思います。我々地域にいるものとしては、そういうことも期待していますし、これもひとつの社会貢献と言えるのではないのでしょうか。

「鹿屋体育大学の取り組みや強みが、世界の中で新たな物差しになっていくんじゃないかという、そんな予感がするんです」

中村：今、国立大学のある種存亡についても話題になりますが、大学間競争は激しくなっていますし、同じような学科は統合すればいいとか、極端に言えば理系だけでいいのではないとか、いろいろ国の方針が合理主義になっていっているというか。そういう点でいうと、鹿屋体育大学はあまり競争相手がいないようにも思うのですがいかがでしょうか。

松下：たしかに、国立大学で言えば学部レベルで体育をやっているのは筑波大学と本学ぐらいです。しかし私立を入れると、日本体育大学をはじめもっと大きな大学があるわけです。やはり都市部にあるというのは一つ大きなアドバンテージなんですよ。試合に行くにも行きやすいですし。では鹿屋の良さは何かと言われた時に、即答できなかつたらすぐに

選択肢から外されてしまうんです。受験生からは経済的支援に関する質問が多いようなのですが、その時に、国立大学だから例えば「活動費を出しますよ」とかいうところまではっきりとした回答できないんです。そうすると、トップレベルの選手は私立の大学に行ってしまう、というのが現状です。

中村：なるほど。ただ、利便性という点で考えると都市部の方がいいかもしれませんが、ここは広大な敷地に恵まれた施設があります。また、鹿児島という土地が持っている地力とうまく結びついていけば、非常に魅力のあるところだと思います。アジアの人たちと接する機会も多く、学生の国際化につながるでしょうし、あるいは温泉や自然環境など学問レベルでもこの地域ならではの魅力があると思います。そのあたりを上手く PR できればよいのではないのでしょうか。



松下：今年、財宝さんからご寄附をいただき「鹿屋体育大学・財宝産学連携寄附研究講座」を開設しました。この講座の中では温泉と運動についても研究していきます。そういう意味では、鹿児島の持つ地力と結びついたものとなっています。また、現在「国際スポーツアカデミー」というオリンピックに向けてやっている事業があります。この事業は、アジア地域の院生レベル以上の学生等が本学にきて、オリンピック教育を受けたり、スポーツイベントのあり方やスポーツパフォーマンス研究について学んだりしてもらうものです。事業自体は 2020 年で終わってしましますが、その間にアジアのこれからのリーダーになっていく若者達とネットワークを作っていくってほしいと考えています。そうすれば、その人的ネットワークを活用して共同研究が始まったりして、本学がアジア地域の、体育・スポーツ・健康などの研究の核になれるんじゃないかと思っています。そして、昨年にはスポーツパフォーマンス研究棟 (SPLab) という素晴らしい施設ができました。鹿屋市からも寄附がありましたし、大事に育てていかなければなりません。ですから、私が学長に就任し



最先端研究設備が揃う SPLab へは多くのトップアスリートが測定に訪れる

たときに、グローバル担当とスポーツパフォーマンス研究担当という学長補佐のポジションを作りました。担当の 2 人にはアジア地域の研究の核となるような組織を作ってもらえるよう取り組んでもらっています。うまくいけば、本学がアジア地域の中心になって活躍出来るのではないかと思います。

中村：私もそういうふうになることを期待しています。偶然かもしれないですが、再来年は明治維新 150 年です。鹿児島というのは特に明治維新の地としてイメージが強いですから、諸外国も含め、関心も高まると思います。グローバル化が進めば進むほどローカルの価値が高まり、新しい価値基準が生まれてくるわけですから、先生が先ほど言われた鹿屋

体育大学の取り組みや強みが、世界の中で新たな物差しになっていくんじゃないかという、そんな予感がするんですよ。

松下：そうなれるように頑張ります。

中村：屋久島の例でいうと、あそこは昔はただの過疎地でしたが、今は世界遺産となっています。屋久島自体が変わるわけではないのですが、だんだん時代が変わってきて、それとともに価値観が変わっていくわけです。まさに、グローバルの中でのローカルの価値の高まりというものを見ている感じです。同じように鹿屋体育大学の価値というのも、この時代の変化の中でどんどん高まっていくと思いますから、それを発信し続けていただきたいと思います。

松下：そうですね。今、大学は情報が学内だけで動いているというのが多い。しかしそれではいけないと思っています。大学を開かれたものにしていくために、何をやっているかということしっかり発信して、説明責任を果たしていかなければならない。私の目指す「発信化」というのはそこなんです。ただ、我々は、その道の専門家ではないですから、どのように情報を発信していけばいいのかを模索しているところです。ぜひ、そういうところを専門家の目から、アドバイスなど、ご協力いただければと思います。

中村：情報発信そのものはストレートにわたしたちを媒体としてどんどん活用していただきたいと思います。情報発信にあたって大事なのが、この時代の価値転換の気流、時機をつかんで情報発信することです。2020年の東京オリンピック、かごしま国体を迎えるにあたって、これまで以上に鹿屋体育大学の存在価値が高まっていく時期だと思います。ただの情報発信ではなく、それとかみ合わせて情報発信することが必要だと思います。

松下：大学も広報室を充実させて、戦略を練りながら広報をしっかりと行っていきたいと思っています。ぜひ、ご協力いただき、鹿屋体育大学の価値を発信していければ、そしてそれが鹿児島という地域の活性化につながればと思います。

本日はいろいろといいアドバイスをいただきました。ありがとうございました。

中村：こちらこそ、ありがとうございました。

